PROJECT

世界のことばの系統関係とその理論的背景を考える

文
菊澤律子

共同研究 ● 言語の系統関係を探る──その方法論と歴史学研究における意味（2009-2012）

ことばの系統関係とはなにか

現在地球上で話される言語は6,700を数えるといわれる。当然ながら、これらの言語は6,700のそれぞれが独立して出現したのではなく、いくつかの「親」となる言語から分岐し発達した結果、現在の状況にいたった。この親となる言語を「祖語」とよび、同じ祖語から発達した言語、つまり祖先を共有する言語は「系統が同じ」であるという。系統が同じ言語のグループのなかで特に大きなものは「語族」とよばれることが多い。インド・ヨーロッパ語族は、なかでももっともよく知られた言語グループであろう。現在、世界の言語の帰属関係は11〜13の語族を前提として示されることが多い。それぞれの語族においてはさらに、系統図（図1）で示されるような所属する言語間の「系統関係」が提示される。系統関係は、祖語から現在話される言語への分岐の過程を示すものである。

図1に示したオーストロネシア語族は、語族と呼ばれるものの中でおそらくもっとも若いが、その親言語であるオーストロネシア祖語が話されていたのは、考古学等における研究結果に基づき今から約5,000年前と考えられている。各語族の時間的な深さ、つまり祖語から現在に至るまでの長さは一様ではないが、いずれにしてもその過程が記録として残っているわけでも、ましてや言語が分岐した様子が直接観察できるわけでもない。言語の系統図は、現在話されている言語を比較し分析することで理論的に再建されるものである。現存する生物の形態等を比較して生物の進化史をわりだすのと考え方は似ているが、音もしくは身振りからなる言語の場合には、地面を掘っても化石が出てこない、というところが少し違っている。

比較方法と系統論

語族や系統関係の検証には、伝統的には比較方法（Comparative Method）が用いられてきた。比較方法は、ことばは変化する、という大前提の上に成り立つ。言語を構成する要素にはさまざまなものがあるが、そのうちの「音素」、つまり発音の基礎となる単位の変化に規則性があること、さらに変化が起こればそれが言語全体にわたり（＝言語中のすべての該当する音素に）反映されることなどから、複数の言語を比較し過去に遡るための主要な手がかりとされてきた。変化に規則性があるとは、例えばpという音なら、f→h→?→øの方向に変化するとか、pがいきなりzに変化したりはしない、といったようなことである。このため音は言語におけるDNAとでもいえる存在となっている。

言語の系統関係は、定義にしたがえば、共通する祖先となる言語（祖語）から発達したことが、比較方法を用いて検証できるかどうかによって決まる。ところが、実際の系統分類では、類型論的特徴や地理的区分、歴史に関する記録などに基づくものもみられる。それぞれの語族における最新の系統分類がどのようなもので、どのような方法で何を根拠に系統関係が議論されているのか、また、その問題点にはどのようなものがあるのか、さらに、その手法はどのくらい科学的に妥当で他語族に適用できるのか、という疑問が生じることになる。

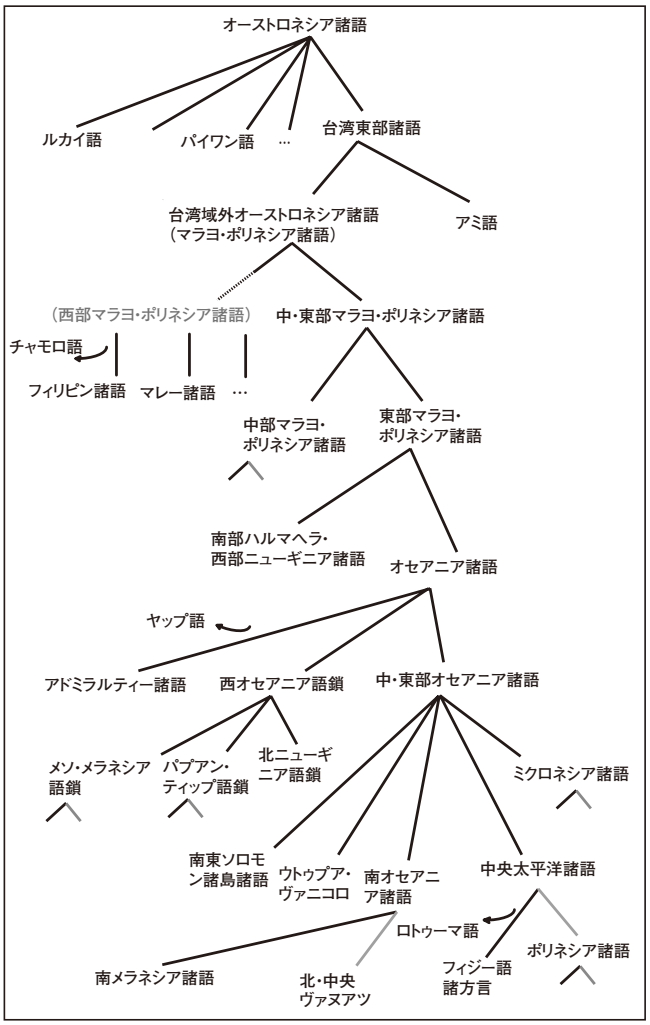

図1 オーストロネシア諸語の系統図の一例。

日本語で言語の系統について議論するときには、「語族」が同系統の言語のグループを指し、「諸語」がそうでないものを指す、という慣習がある。加えて、「語族」とその下の層を「語派」「語群」として区別することもある。いずれも定義上問題があり、用語の使い方についても語族を超えた視点からの見直しが必要であると考える。図ではこの問題を避けるためにも、言語のグループをすべて「諸語」としている。

言語の系統研究は、その性質上、それぞれの語族を単位としてその範囲内で研究が進み、対象となる言語グループの状況に応じた再建の手法やアプローチが発達する。同じ比較方法の考え方に基づく場合でも、どのようなデータが入手可能か（＝関連言語の記述がどれだけ存在するか）、書き言葉が存在したか否かによって分析の仕方が異なるなど、その背景によって具体的な研究方法が変わってくる。さらに他研究分野との関係も、歴史的に知られている事実を系統分類に反映させるかさせないか、言語の系統分類を先史研究に反映させるかさせないか、などさまざまである。

まずは系統研究の全体像をつかみ、その潜在的な可能性を一つにまとめ、語族をまたいで歴史言語学の専門家が話し合い、それぞれが専門とする対象言語グループについての研究を報告しあう場を設けてみよう、ということで、共同研究プロジェクト「言語の系統関係を探る――その方法論と歴史学研究における意味」ははじまった。対象としている言語グループの性質や社会的背景により異なる言語の系統に対する考え方、その解明のためのアプローチの仕方を報告しあうこと、また、成果の他分野での研究内容への結びつけ方、すなわち、言語の系統を明らかにすることが、各語族に属する言語を話す民族の先史・歴史研究にとってどのような意味をもつのか、について広い視点から考える可能性へも結びつけたいと考えている。

系統図が示すもの

「言語の系統図」とひとことでいうが、近年ではさまざまな形がみられるようになった。図1のような古典的な系統樹タイプのものに加え、言語間の距離を示す網目状の図が使われることもある。図2は最近のコンピューター分析の試みの結果を示したもので、変数の取り方により図が変化する。それぞれの図と分析方法がもつ意味や系統研究への生かし方を整理する必要が出てきているように思われる。

図1で示したような古典的な系統図については、言語接触の結果が反映されない、いったん分岐した二言語がまた融合した場合はどうなるのかなどの「問題点」が、はやくから指摘されてきた。新しく出現した言語の特徴が、最初に出現した地点を中心として波のように波及してゆくとする波動説（wave model）が、系統樹説に対するアンチテーゼとして確立されたことはよく知られている。ただし、系統図が言語間の系統関係（祖語から「遺伝子」がどう受け継がれてきたか）に基づいているのに対し、波動説は具体的な言語現象の地理的伝播の様相を話題にしており、そもそも扱うものが異なっていることは明らかで、このあたりも整理して考える必要がある。

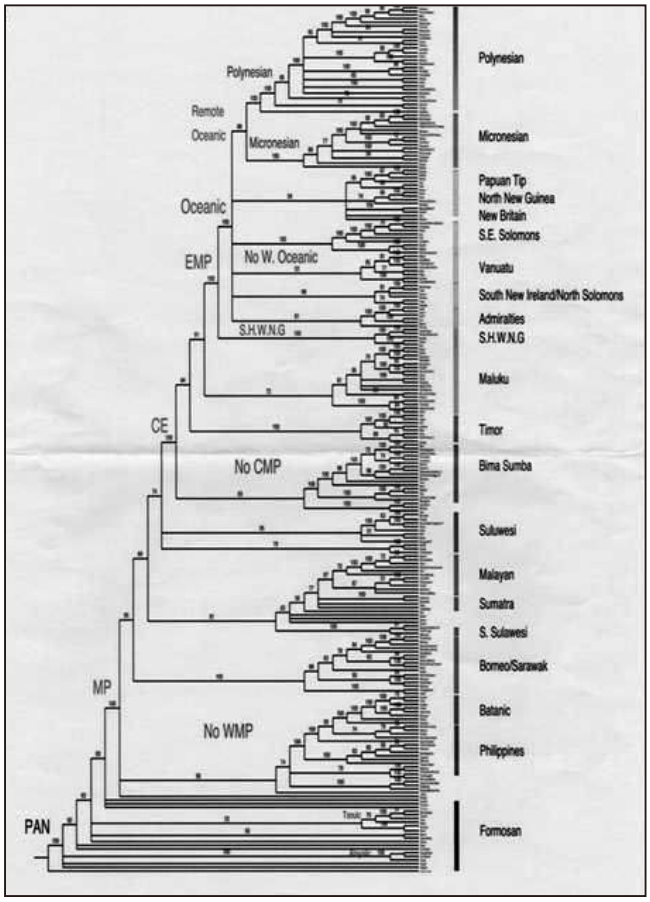

図2 コンピューター解析による系統図の一例（Russell Grayの解析による）。

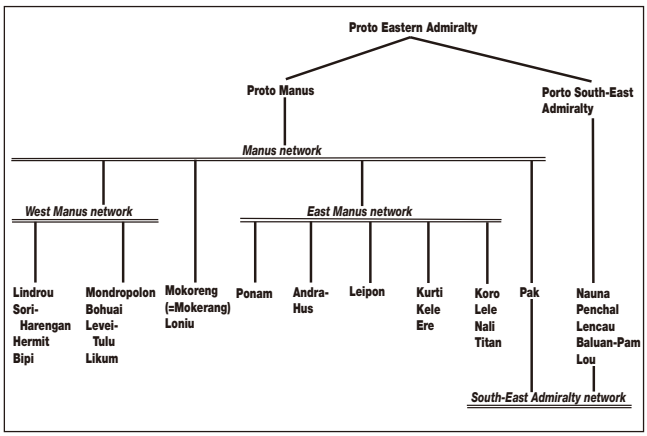

図3 方言鎖を組み込んだ系統図の一例（Ross 1988：317）。

今年度第一回の研究会では、祖語の再建に方言鎖（dialect chainまたはdialect continuum）の概念をあてはめるケースについての言及があった。オーストロネシア語族の系統分類について、地理的にはフィリピン北部からニューギニア島まで広がる方言鎖が形成されていたと考え、これを反映させるのに、結束点から分岐する図のかわりに祖語を横並びで示すという。言語系統図が即、現実的な言語のあり方や人の移動と結びつくという意味で、通常の系統図を用いるよりも一見よいアプローチであるように聞こえる。ところが、地理的な広がりや、時間軸に沿った変化という考え方を系統図に組み込んでしまうと、結局は言語そのもので再建しうる特徴とその他の側面を区別せずに議論をすすめることになってしまい、波動説を系統樹の代替物として扱うのと同様に、異種の情報の折衷になってしまう。言語接触や、分岐した二言語の融合、そして方言鎖を取り入れる前に、それを表現できない系統樹モデルに「問題」があるのではなく、系統樹モデルの解釈の仕方に問題があるのだと考えてみることが必要ではないだろうか。

以上のような疑問を頭の中で転がしつつ、今後の研究会での議論がどのように展開してゆくのか、大いに楽しみにしている。

【参考文献】

Ross, M.D. 1988. *Proto Oceanic and the Austronesian Languages of Western Melanesia.* Canberra: Pacific Linguistics.

きくさわ りつこ

民族文化研究部准教授。専門は、オーストロネシア諸語を対象とした比較（歴史）および記述研究、比較統語論、言語類型論、オセアニアの先史研究。著書に *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*（Canberra: Pacific Linguistics, 2002）、論文に "Historical changes in pronoun positions in Extra-Formosan languages"（*Current Issues in Austronesian Linguistics: Papers from the 10th ICAL*, 2008）など。